

3

文学を研究すること — 世界の文学を題材に—

これまで世界各地で生み出され、伝えられてきた文学作品を「研究する」とは何を意味するのでしょうか。作品鑑賞・批評との違いは何でしょうか。本講座では世界の物語や小説、演劇を題材に文献学や言語研究、文学理論といった大学ならではの視点から、作品の読み解き方や研究の面白さを紹介します。

会 場	対 面：	1回・2回：広島大学東千田キャンパス 慎思棟5階 SENDA LAB 多目的スペース
	対 面：	3回・4回・5回：広島大学東千田キャンパス 東千田未来創生センター3階 M303講義室
	オンライン：	—
時 間		①13:00～14:15 ②14:30～15:45 ③16:00～17:15
定 員	対 面：	70 名
	オンライン：	— 名
対 象		どなたでも
受講料		無料
申込方法		郵送・Web
申込期限	一次申込締切：	10/5 (月)
		※ 定員に達しなければ 10/22 (木) (必着) まで先着順で受付

ブルーラヴァス王と天女ウルヴァシーの物語

講 師：大学院人間社会科学研究科 准教授 尾園 絢一

第1回

11/1 (日)

①13:00～14:15

地上の王ブルーラヴァスが、夫婦の契りを交わした天女ウルヴァシーを探し求めて彷徨い歩く物語は古代インドのバラモン教聖典「ヴェーダ」から文豪カーリダーサの作品に至るまで長く愛され語り継がれてきました。本講義では、最新の研究に基づいて神話資料や文学作品を読み解き、この神話的物語がどのように受容され、変容してきたのかをたどります。

『オペラ座の怪人』を評価する

講師：大学院人間社会科学研究科 教授 宮川 朗子

第2回

11/1 (日)

②14:30~15:45

文学研究の目的は、なんといっても作品を評価することでしょう。その方法は多様ですが、作品のジャンル、文章の美しさ、思想性、それが生まれた時代との関係性の観点などからその価値が総合的に判断されます。この講座ではガストン・ルルー『オペラ座の怪人』(1910)を例にとり、この作品がどのように評価されるのかをお話しします。

18世紀ドイツ演劇黎明期におけるレッシングの喜劇と演技論

講師：広島大学 名誉教授 小林 英起子

第3回

11/29 (日)

①13:00~14:15

18世紀中頃までドイツ演劇はフランス、イギリス等の演劇界に比べてまだ黎明期にありました。劇作家レッシングは古代ローマやヨーロッパ周辺諸国の演劇の影響を受け、翻訳や翻案の試みを経て、ドイツ的な喜劇を創作していきます。レッシングの喜劇に見られるセリフの機知と愉快さ、諷刺、そして革新的な啓蒙思想を解き明かし、彼が考えた演技論を紹介します。

さまざまな『源氏物語』

講師：大学院人間社会科学研究科 准教授 小川 陽子

第4回

11/29 (日)

②14:30~15:45

日本の古典文学は、手で書き写すことを繰り返しながら現代まで伝わってきました。書き写す際に誤りが生じることもあれば、あえて文章を書き換えることもあり、結果的に、同じ作品であっても複数のバリエーションが生まれることとなりました。本講義では、『源氏物語』のバリエーションに目を向け、その生成背景と多様な作品世界について考えます。

「英詩の父」チョーサーの文学作品とその言語

講師：大学院人間社会科学研究科 教授 大野 英志

第5回

11/29 (日)

③16:00~17:15

「英詩の父」と呼ばれるジェフリー・チョーサーが活躍した14世紀後半は、イングランドにおいて約300年にわたってフランス語が重視された後、英語が再びその地位を回復しつつあった時代でした。本講義では、このような言語状況の中で、チョーサーがフランス語からの借用語をどのように英語作品へ取り入れたのかについて考えます。

講座内容に関する
お問い合わせ先

人文社会科学系支援室(文) 運営支援担当

電話： 082-424-6602

メール： bun-soumu@office.hiroshima-u.ac.jp